

京都大学	博士（文学）	氏名	榮福真穂
論文題目	スピノザにおける観念の形而上学		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、17世紀オランダの哲学者バルーフ・デ・スピノザの観念説が、形而上学的な観念説であるという点に特徴を持つことを明らかにしようとするものである。それにあたって、本研究はデカルトを参照軸に用いることで、「観念の实在論」とも呼ぶべきスピノザの観念説の特異性、ひいてはそれを成立させているスピノザの形而上学的体系そのものの特異性を明らかにしようとしている。</p> <p>本論文の構成は以下の通りである。</p> <p>序論</p> <p>第1節 歴史的背景</p> <p>第2節 スピノザの観念説という空白地帯</p> <p>第3節 本研究の主題と構成</p> <p>第1部 「観念(idea)」概念史の中のスピノザ：ポスト・デカルトの観念説</p> <p>第1章 デカルトの観念説①：観念の対象的事象性</p> <p>第1節 『省察』本文における観念の二面性</p> <p>第2節 第三省察における観念の対象的事象性の役割</p> <p>第3節 観念の対象的事象性と表象像</p> <p>小括</p> <p>第2章 デカルトの観念説②：観念の形相的事象性</p> <p>第1節 「形相(的)」の多義性</p> <p>第2節 第三省察における観念の形相的事象性：神の存在証明の厳密性との関わり</p> <p>第3節 観念の二つの事象性と因果性の問題</p> <p>小括 『省察』の慎重な観念説</p> <p>第3章 デカルト以後の展開：近世的「観念」概念の成立におけるスピノザの特異性</p> <p>第1節 アルノーおよびマルブランシュ(1612-1694, 1638-1715)</p> <p>第2節 ロック(1632-1704)</p> <p>小括</p> <p>第3節 スピノザの観念説の特異性</p> <p>第2部 スピノザの観念説①：観念の存在</p> <p>第4章 スピノザにおける観念の二面性</p>			

第1節 「観念の形相的有」の導入

第2節 「観念ないし对象的有」の導入

第3節 『エチカ』の認識論的地平

小括

第5章 平行論と観念説

第1節 平行論の諸相

第2節 『デカルトの哲学原理』から『知性改善論』へ

第3節 『短論文』の創造論における神の知性の役割

小括

第6章 事物としての観念：観念の〈能動性〉と〈事物性〉

第1節 観念の能動性：デラロッカの解釈

第2節 「観念=能動(作用)」説の反デカルト性？

第3節 観念の〈能動性〉と〈事物性〉

第3部 スピノザの観念説②： 神における平行論から人間の認識へ

第7章 「存在しない個物の観念」とは何か：『エチカ』第2部定理8再考

第1節 形相的本質

第2節 個物が「存在しない」とは何を意味するか

第3節 「存在しない個物の観念」は偽なる観念か

第4節 对象的有と観念の条件付きの互換性

小括

第8章 『エチカ』における虚偽の観念

第1節 議論の前提：人間精神と観念との関係

第2節 楽観的認識論？

第3節 虚偽の契機：「表象」の導入

第4節 虚偽の解体と方法論の不在

第5節 スピノザの方法論

結論

文献表

初出一覧

以下、各章の内容を要約する。

第1部は、デカルトにおける観念説の内実を、「对象的事象性」と「形相的事象性」という観念の持つ二つの側面に着目して明らかにしようとしている。デカルト『省察』の解釈において、観念の役割を主観的な領域から客観的な領域への超出のための梃子としての役割に見出すことは、きわめて一般的な傾向である。そうした解釈

は多くの場合、第三省察における神の实在のアポステリオリな証明に主として依拠しており、そこでは神の観念からその存在への推論がなされている。第1章ではそこで明示的に重要な役割を果たすのが観念の「対象的事象性」であることが論じられる。しかし筆者によれば、デカルトにおいて観念はその対象となる存在すなわち外的事物と区別された上で関係づけられるだけでなく、観念それ自体にある種の「存在」としての地位が与えられている。筆者は、この従来あまり着目されてこなかった「形相的事象性」としての観念という論点がスピノザの観念説を理解するために重要であることを指摘する(第2章)。最後に、第3章では、デカルトの影響下で観念説を展開したマルブランシュ、アルノー、ロックの立場を、観念の二面性のどちらかを重視したかという観点から整理したうえで、これら「ポスト・デカルト」の観念説の文脈の中でのスピノザの位置づけを明らかにする。

第2部では、デカルトの二側面的な観念説を引き継いだスピノザが、そこからどのように逸脱し、独自の観念説を展開しているのかが明らかにされる。ここで筆者が重要視するのは、スピノザがデカルト的な観念の二面性を受け入れつつも、デカルトとは反対に、観念の対象的側面よりも形相的側面を強調している点である。筆者はこの点を強調しながら、従来のスピノザ観念説についての認識論的理解の不十分さを指摘し、観念の真偽が問題となるよりも手前の問題、そもそも観念とはいかなる存在であるのかということもまた、スピノザにおいては重要な問いであると主張する。スピノザにおいて観念は、人間の心とは独立に、まず神のうちにあるものとされ、そうした位置づけは観念説の存在論的観点からの解明を必然的に要請するものであると筆者は主張する。

こうした背景を踏まえ、第2部においてはスピノザにおける観念それ自体の存在の問題が主題となる。ここでは、スピノザにおける「観念」の存在論的身分はどのようなものか、という問いに取り組みされる。その答えは、筆者によれば、観念は「思惟様態」であり、「個物」であり「事物」なのだ、というものである。まず第4章では、デカルトと共有された「形相的」「対象的」という対概念が、スピノザの観念説においてどのように用いられているのかが明らかにされる。そうして、それらの概念が平行論というスピノザ独自の体系の成立において重要な役割を果たしていることが明らかにされる。次に第5章は、そうして成立する平行論についてより詳細に検討し、スピノザの平行論的体系にとっては、個々の人間精神によるその都度の認識にとどまらず、体系全体において思惟と延長の「一致」が成り立っていることが重要だということが明らかにされる。そこから筆者はスピノザの観念説は必然的に形而上学的にならざるをえないのであり、このことはスピノザの観念説の一つの特徴を成していると主張する。第6章では、前章で明らかにしたような『エチカ』の平行論的体系のうち、もう一つの重要な要素である因果的独立性に着目し、これが観念説にどのような帰結をもたらすのかを考察している。そこで第1部の議論を踏まえてデカルトと比較することで、スピノザにおいては、観念も物体的事物とまったく同等に「事物」とであるとみなされているという点に、スピノザのデカルトからの大きな逸脱を見出す。

第3部は、観念説の存在論的側面を主題とした第2部の探究を踏まえ、スピノザの

観念説の認識論的な側面に光を当てる。第2部で明らかにされるように、スピノザはデカルト的な観念の二側面のうち、形相的側面を強調したのに対し、対象的側面の意義はデカルトの場合よりも見えづらくなっていた。まず第6章では、第4章で明らかにされた、体系レベルで打ち立てられた認識論的土台の上で、いかにして実際に個別的认识が成立するのかが検討される。第7章では、「存在しない個物の観念」の存在論的身分を明らかにすることによって、『エチカ』第2部定理7およびその備考において成立した体系レベルでの平行関係が、その後いかにして個々の事物の水準へと適用されるのかを検討することで、観念と「対象的有」との言い換えがなされる際、条件が浮き彫りにされる。最後に第8章では、こうした認識論的方法論の問題について、ふたたびデカルトと比較しながら考察され、大掛かりな形而上学的体系によって基礎付けられるスピノザの認識論の、実践的なあり方が明らかにされる。そうした検討を通じて、最終的に筆者は、スピノザの体系は彼の死後論じられてきたような唯物論の体系でも観念論の体系でもなく、「観念の実在論」の体系であると結論づける。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、主著『エチカ』を中心とするスピノザの哲学における、「観念idea」が占めるその独自の位置を明らかにし、とくにその形而上学的理解を強調するものである。著者は、その前史としてデカルトの観念説を扱い、デカルトにおける「観念」概念の二義性を明らかにし、このデカルトの議論がスピノザの観念説に影響を与えていることを示し、そこからスピノザの観念説の独自性を明らかにしようとする。

現代私たちが理解する意味でのideaという語の用法は、まさにデカルトに由来する。つまり、それ以前はプラトンのイデアに端を発し、超越的な実在という意味で理解されていたideaという語を、主観に属する表象という意味で用いたのである。デカルトは『省察』『第三省察』においてこの主観的な表象という意味での観念が持つ「対象的事象性」から神の「形相的事象性」を推論することによって神の存在証明を行ったのである。しかし、著者によればデカルトはもう一つ別の意味でideaという語を用いている。それは、「思惟の様態」ないし形象的な事象性としてのideaである。

著者によれば、デカルトはこうした第二の意味でのidea概念をそれ以上は展開しなかった。この二義性を引き継ぎつつ、この後者の側面、つまり形相的事象性としての観念という概念をより展開したのがスピノザであるとする。

スピノザは、人間の精神と身体とを唯一の実体である神の属性としての思惟と延長の様態であるとする独自の一元論的実体概念によって知られているが、まさにそこで観念は人間の主観的表象である以前に、神に属する形而上学的意義を持つことになる。筆者はそこから、スピノザの平行説が、神における観念と物体の平行と、人間における精神と身体との平行という二重性の中で、観念が認識論的意義だけでなく形而上学的意義をも持つことを強調する。

本研究は、第一に広い哲学史的射程の上で、近世西洋哲学における、デカルトとスピノザという巨大な哲学者のテキストに分け入り、スピノザの観念説をその平行説との関連から詳細に明らかにしている点が評価されよう。とくにスピノザの観念説についてはこれまでいくつかの研究が著されているが、そうしたデカルト研究を踏まえて、スピノザの観念説の独自性を明らかにした点に、第一の大きな研究上の貢献がある。

第二に、スピノザにおける観念の形而上学的／存在論的側面を綿密な論証によって説得的に明らかにした点が長所としてあげられよう。このことは、近世哲学史研究において観念がもっぱら認識論的な文脈で扱われてきたことからして、大きな貢献である。

第三の利点として、哲学史における最も根本的な問題のひとつに正面から取り組み、丹念なテキスト読解とともに取り組んだことがあげられる。しかもオランダ語も含む多様な言語のテキストに取り組んでいることは評価されてよいだろう。

以上のように本論文は、すぐれた長所を持っている。しかし、欠点がないわけではない。

第一に、本書で「形而上学」といわれているものの内実がかならずしも明確でない点である。特に第3部において平行説から「人間の認識」へ議論の焦点が収斂していく中で論じられている内容は、むしろ認識論を結論としているような印象を与える。それは、本論文のタイトルとなっている「形而上学」を著者がどのようなものとして理解しているのかが明確にされていないことに伴う問題であろう。

第二に、第1部第3章で、まさにデカルトとスピノザの間をつなぐ、アルノー、マールブランシュ、ロックにおける観念説について扱われているが、この箇所は他の章と比べて、表面的な比較にとどまってしまった感が否めない。但し、本章の位置づけは補足的なものであり、メインの論点であるデカルトとスピノザに関する考察を損ねるものではない。

第三に、上記の本稿における骨太な問題を中心的に論じたことの副作用として、多くの本質的な問題が、触れられないままにとどまっていたり、注において簡単に片付けられたりしている点が残念である。たとえば、118頁の注195では、スピノザの「個物」と観念との対応について恣意的な前提であることが指摘されているが、これは前章で「存在しない個物」が扱われていることからいっても、本論においてより詳細に明らかにされるべき論点であったように思われる。また、スピノザのいわゆる「三種の認識」における認識論について論じないのであればそのことについて何らかの言及が必要であっただろう。

ただし、以上の問題は本論文の本質的な学術的価値を損ねるものではなく、また本人もその不足について自覚するところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2024年1月29日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。